

馬面から見た文化交流

巽善信

Cultural Exchange in Asia Based on the Study of Horse-forehead Ornaments

Yoshinobu TATSUMI

キーワード：馬面、汎アジア、伝播、変容、形態

Key-words: Horse-forehead Ornament, across Asia, Spread, transfiguration, Form

はじめに

馬面は馬の額部分に付ける装飾であり、馬の体全体を被うことで攻撃を防ぐ機能的な馬冑・馬甲とは性質が異なる。面繫の構造上なくてはならないものではないため、かえって自由に成形できる。これは模倣し易く、伝播が早いということでもある。まずある集団が最初に馬面を付けたとしよう。その背景には馬面を付けようとする、何らかの強固な共同観念があるはずである。そして馬面は他の集団に伝播されてゆく。その際、まずこの共同観念を共有しているか、それに近い共同観念を持っている場合と、そうでない場合がある。共有もしくはそれに近い共同観念を持っている集団には簡単に受け入れられるであろう。この共同観念を共有しない集団へ伝播する際、この共同観念も同時に伝播する場合と、そうでない場合が考えられる。馬面はその共同観念を表現したもので、言い換えればその共同観念の象徴でもある。その象徴を見ることで、その背景にある共同観念をある程度正確に理解することは十分考えられる。共同観念が伝播するというのは、その象徴である馬面を媒体としてほぼ正しく伝わるということである。これに対し当然、正しく伝わらない場合がある。この場合、まったく独自に解釈して取り入れる。

共同観念を共有する場合は、馬面の細部に至る形態や文様の意味を解し、ある程度忠実に模倣すると考えられる。変容させてもその本質的な変化へは至らないはずである。しかし、共同観念が伝わらなかった場合、形態や文様はその本来の意味を解せず、かなり変容させていることがある。形態や文様に限らず、どうしてそれを付けるのかという意味においても、その地域に合ったまったく異なる独自の解釈がなされる。この場合、伝播の速度は高いが、定着せず一過性であることものではないかと考えられる。アジア全体という広い地域を見るには、独自の解釈による伝播も考慮に入れる必要がある。本稿ではこうした視点から、馬面を通じた文化交流を見てみることにする。

馬面の形態的特徴

西アジア、北アジア、東アジアに分けて、その特徴を述べる。

i) 西アジアの馬面

前9世紀から前6世紀頃にかけての西アジアの馬面を、主にその形態から考察することにする。すでに別稿(巽2003)で詳しく述べているので、ここでは要約にとどめる。実物あるいは馬像に表現されている馬面の形態を観察すると、幾つかに分類できる。両サイドが外に反っていた外反逆台形(図1)、上半部が大きく左右に張り出したT字形をなすT字形(図2)、逆台形(図3)、細長い台形、裾で広がるように両サイドが外反る外反台形1(図4-1)、上部で左右に三角形状に張り出している点が外反台形1と異なる外反台形2(図4-2・3)、細長い楕円形(図4-4~7)である。さらに上記の形態分類は次の2つのグループに大きく分けることができる。1つは台形を基本とした形態で、概して幅は比較的広い。Aグループと呼ぶことにする。これには外反逆台形、T字形、逆台形が含まれる。もう1つは細長い形態をなしている点で共通しており、概して細く、特に上端部は極端に狭い。Bグループと呼ぶことにする。これには台形、外反台形1、外反台形2、細長い楕円形が含まれる。年代の分かる資料は多くなく、ある程度幅を持たせて考えるしかないが、Aグループは先行して出現しており、A、B両グループは年代的に前後すると言えそうである。

分布範囲を見れば、Aグループは地域的には西北部にほぼ限定されている。ウラルトゥでは盛んに用いられていたのに対し、大国であったアッシリアにはその形跡がほとんど認められない。当時、両国は相拮抗し、対立関係にあったが、馬面におけるこの対照的な相違は興味深い。前9~前8世紀頃、馬面自体が西アジアではそれほど一般的ではなかったのかもしれない。ところが前7世紀に入ると、アッシリアのレリーフに馬面らしき描写が見られるようにな



図1 天理参考館蔵青銅製神像文馬面 (縮尺1/6)

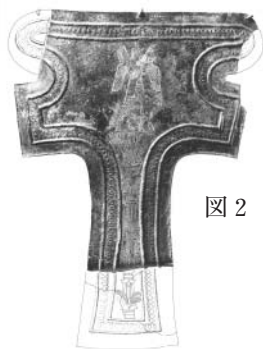
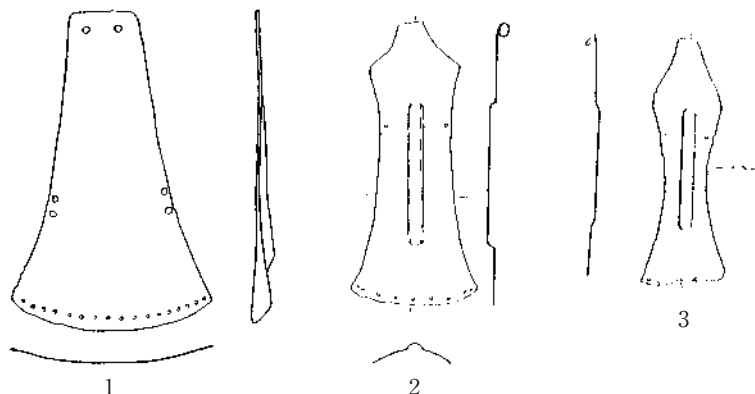


図2 青銅製T字形馬面 (縮尺1/6)
(The Israel Museum 1991 : p.85, no.39)



図3 青銅製逆台形馬面 (縮尺1/6)
(Kantor 1962: Pl.11)

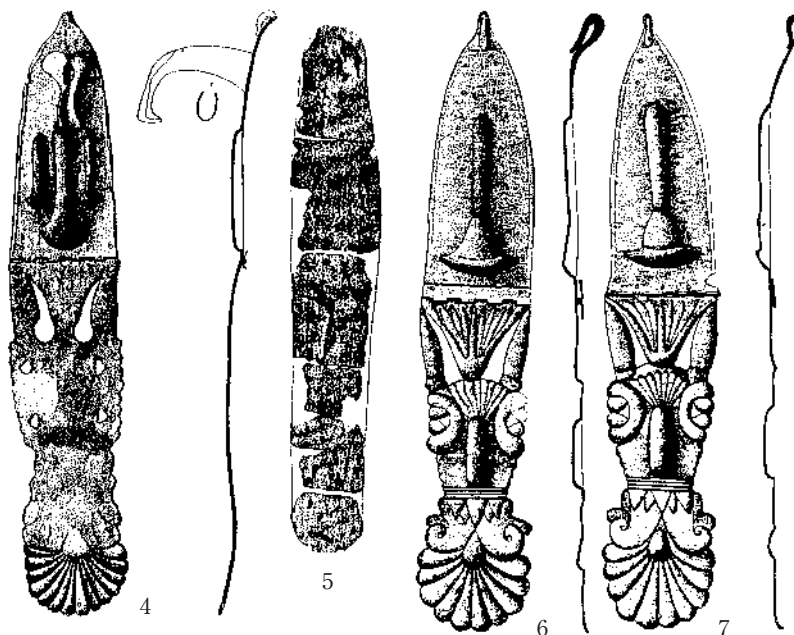


図4 前7世紀頃の馬面 (縮尺1/6)
1 ババジヤン出土例 (Goff 1969: Fig.7-3)
2 天理参考館蔵資料
3 アダナ博物館蔵資料 (Özgen 1984: Fig.16)
4~7 キプロス・サラミス出土例
(Karageorghis 1967: Pls.114, 127)

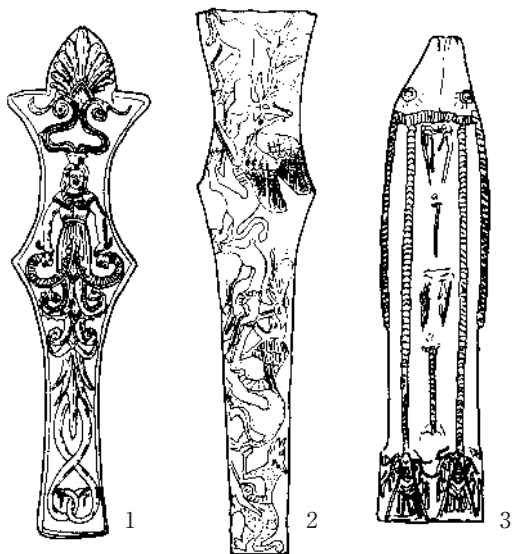


図5 スキタイ馬面 (縮尺約1/6)
1 金製女神文馬面 (日本経済新聞社 1969: no.17を写真トレース)
2 金製動物闘争文馬面 (日本放送協会NHKプロモーション 1992: no.45を写真トレース)
3 金製双魚形馬面 (日本経済新聞社 1969: no.13を写真トレース)

ることが象徴しているように、馬面は広がりを見せ、特にBグループは比較的広い範囲で用いられている。広がりを見せないAグループとは対照的にBグループはその分布範囲を広げていったようである。

つまり前8世紀後半あたりでAグループからBグループへと次第に移行し、前7世紀頃にはBグループは広く普及するようになる。その理由を考えるに当たり、筆者はAグループに神像が描かれているものが多い点に注目している。Aグループには勝利への祈念と神の加護を願い、邪悪な力から身を守る呪術的な意味が込められていたのではないだろうか。勝利を導き邪悪なものを追い払う呪術の意味があったのではないかとと思われる。しかしBグループには神像が見られず、そうした意味合いが見受けにくい。少なくともAグループに比べてその意味合いは薄く、Aグループのような特異性は見られない。Bグループは面繋の中での単なる一装飾要素であると言えそうである。何らかの理由で勝利の保証と邪悪なものから身を守るという呪術的な意味が薄れたために、馬面はその特別な地位を失い、次第に面繋の中での一装飾要素となって行ったのではないかと考える。これまでの古い既成観念で成立していたAグループは消えて行くが、新たな枠組みのなかで生み出されたBグループはその後も継続して用いられ、その分布範囲を広げてゆくことになったのである。

ii) 北アジアの馬面

おおまかな特徴をつかむに必要な資料のみを提示することにする(巽 1995a 参照)。

(a) 黒海北岸ソロハ高塚に近いツィンバルカ古墳から2点の馬面が出土している。そのうちの1点が金製女神文馬面である(図5-1)。上端部が上と左右に、中央部が左右に張りだした細長い方形をなし、下部はわずかに裾が広がっている。女神アビが絡んだ双龍に立ち、グリフォンを押さえている。長さ41.4cm。前4世紀末。もう1点は金製グリフィン文馬面である。形態は前者と類似しているが、上端部の張り出し部分がない。上部がやや幅広く、中央部が三角形状に張り出した細長い方形をなす。上部には2匹のグリフィンとそれを押さえる人物、その下には翼が表現されている。長さは図版から判断し40cm程度である。このほかにも銀製馬面が4点出土している

(b) アゾフ海北岸、ベルジャンスク古墳から金製動物闘争文馬面が出土している(図5-2)。ツィンバルカ出土の金製グリフィン文馬面とまったく同じ形態で、上部がやや幅広く、中央部が三角形状に張り出した細長い方形をなす。鹿を襲うグリフィンと鹿に噛みつくライオンが型押しで描かれている。長さ42.8cm。前4世紀。

(c) ウクライナの森林草原地帯に位置するヴォルコフツィ

村古墳群から金製魚形馬面が出土している。魚の形をなし、眼、口、鱗などの細部を型押しで表現している。長さ28.4cm。前4世紀。

(d) 黒海北岸、ドニエプル下流にあるソロハ古墳より金製双魚形馬面が出土している(図5-3)。二匹の魚の合わせた形態をなす。長さ38.8cm。前5世紀末～前4世紀初頭。

(e) アルタイ地方のトゥエクタ第2号墳より木製双猛禽文馬面が出土している。円形をなし、二羽の鷹グルフォンを描いている。径12.7cm。前5世紀。

(f) アルタイ地方のトゥエクタ第2号墳から頭部に立て飾りを差し込んだ馬頭飾が出土している。立て飾りには1点は鹿角を、もう1点はグリフィンを装着している。いずれも皮革、フェルト、銅そして金箔でできている。馬の額部から鼻梁部にかけての個所と頬を被う部分があり、馬面形態をなす。その馬面部分が左右に舌状に張り出している点が興味深い。さらに木製の馬面が3種類出土している。すなわち円形で中央部は半球形状の浮彫となっているものが3点、半月形状をなすもの1点、そして逆三角形で上半部の輪郭が丸い、水滴状の形態をなし、中央部が輪郭に沿って浮き彫りされているのが1点。水滴状馬面には金箔が貼られている。大きさは10～15cm程度である。前5～4世紀。

(g) アルタイ地方のパジリク第2号墳より立て飾りを差し込んだ馬頭飾と角製動物闘争文馬面、そして木製円形馬面が2点出土している。馬頭飾は頭部上半部と頸部を被うもので、立て飾りは山羊の頭部とその上に乗る鳥からなる。角製動物闘争文馬面は二羽の鳥を銜えている獅子(?)を象っている。長さ20.6cm。前5～4世紀。

(h) パジリク第3号墳からは第1号墳出土例とは異なる種類の木製馬面が出土している。半月形ではあるが、両端が丸く、いわゆるブーメランの形態に似ている。この種の馬面は3号墳からだけでも3点出土している。大きさは15cm程度。前5～4世紀。

これらの多くは儀礼的で、どの程度実用されていたかは不明ではあるが、全く実用していないものを儀礼にのみ用いるというのも考えにくい。もっと機能的なものではあろうが、これに類似した形態で、皮革製か木製の馬面が用いられていたと考える。こうした有機質の馬面は腐って遺りにくい。たとえば(a)～(c)であげた金製馬面は薄く、当然それだけでは形状を保つのは難しい。木製か革製の基胎部があったと思われる。たまたま表面を金で被っていたからその部分が遺って馬面の存在が分かったにすぎない。したがって掲出した資料よりも年代が遡るものがある可能性を、頭の片隅にでも置いておく必要がある。現存する資料がどれほど当時の状況を復元できるか問題もあるが、現段

階で述べると次のようになる。

特徴としてはまず、魚の外形を象るなど象形的なものも、円形や長方形を基本とした非象形タイプもそれぞれ多く存在することである。またドニエプル河流域アレクサンドロポル古墳とチミュレバ・モギラ古墳から立体的獣頭の立て飾りをつけた馬面とされる金製品が出土しているようで、たぶんバジリク出土例と構造的に類似するものと考えられる。広大な地域であるが、北アジア一帯に類似した文化があったことが改めて理解できる。しかしながらウクライナ地域とアルタイ地域とは若干の差違も見られる。まずウクライナ地域のものは象形、非象形両方のタイプとも細長い点で一致する。その大きさ、形態から判断して、鼻梁部を飾るのに適している。(a)と(b)は中央部のやや上に左右に張り出した部分を持っているが、これは両眼の輪郭に沿ったものである。非象形タイプではあるが、馬の額部に合わせた自然な形態であると言える。一方、アルタイ地域のものも象形、非象形タイプが揃っているのだが、次の点で異なる。まず大きさが大小、様々である。次に非象形タイプが円形、半月形などその形態が豊富である。大型で、長方形を基本とした細長いものが多いウクライナ地域とは対照的である。アルタイ地域に円形や水滴形をなす馬面があるのは同時期である戦国時代の中国北方地域とも共通する。

iii) 東アジアの馬面

内蒙古自治区や寧夏回族自治区、甘肅省は現在では中国であるが、いわゆる中原地域とは異なり、北方騎馬民族との関連は強い。したがって本稿では中国北方地域と中原地域に分けて記述する。以下、明記しない限りいずれも青銅製である。

①中国北方地域

春秋時代から馬面が現れ始め、戦国時代になるとその出土例は増えてくる。主なものを挙げる。まず、細長い丸みのある長方形で、馬と思われる目と鼻を描いている馬面がある(以下、馬頭形B類と称する)。寧夏回族自治区中寧県倪丁村の2号土壙墓より出土している。人骨の上から馬頭骨が発見され、その馬頭骨の近くで馬面が10点出土したのである。馬面と推定させる有力な根拠と言える。そのうち4点がこの馬頭形B類に属する。上部がやや張り出し、下部でかすかに広がる。周辺部に鋸歯文を巡らせ、目・鼻を内部に描いている。そのうち1点の長さは21cmである(図6-1)。残りの6点に関しては後述する。戦国初期に位置づけられている。また発掘例ではないが、駒井和愛が紹介している馬面がある。それはワニヤック収集品で、馬の顔面が写實的に表現されている。長さは約21cm。周末戦国とされている。駒井はこれがイタリアのアプリア地方で発見された青銅製馬面に酷似していることから、ギリシア

とスキタイの接触により構成されたグレコ=スキタイ文化の中国への波及を示す1点ととらえている。

非象形では水滴形をなす馬面が出土している。バリエーションはあるが、基本的には上部が丸く下部が尖っており、中央部が丸く突起している。上部も尖り菱形に近い形状のものもある。たとえば寧夏回族自治区彭陽県から合わせて40点が近年報告されていて(図7)、年代は春秋晩期から戦國中晩期に位置づけられている。類似例は寧夏回族自治区以外でも甘肅省、内蒙古自治区から多数出土する。先述したように、アルタイ地方から木製の類似例が出土している。また方形と円形を重ねた形態をなす馬面がある。甘肅省慶陽地区より7点。そのうちの1点は7.5cm。春秋から戦国中期に位置づけられている。先述した寧夏回族自治区中寧県倪丁村2号土壙墓より6点出土している。2匹の怪物が向かい合った図柄がある(図6-2)。長さは8.8~10.4cmである。戦国初期に位置づけられている。また内蒙古自治区赤峰市寧城県小黑石溝で夏家店上層文化の墓から馬面らしきものが出土している。図示されていないが、馬面として形状が記述されている。長方形を基本とした形態で、上方がやや広く、下方がやや窄まっている。正面外周には刻文が巡っている。上部には両眼が突起し、眼下には菱形の突起した鼻があり、獣面を表現している。四隅には鈕がある。長さ21cm。西周中後期から春秋時代に年代付けられている¹⁾。しかし馬面とする根拠がどの程度あるのか報告書の記述だけでは不明である。

②中原地域

河南省安陽市大司空175号墓(車馬坑)から、円形金具が2点出土している。中央部に円形の突起装飾があり、裏面には並列した2本の鈕がある。いずれも径6.7cm。図8で示したように面繫の位置も確認できる出土状況で、金具自体は馬の額部から出土しており報告書では馬面とされている。殷後期に年代付けられている。ただし他の遺跡から出土した類例で、報告書では単に円形金具と表記され、馬面と同定されていないものも多い²⁾。面繫の飾り金具の1つという理解である。ただ他のものよりは大型で特別視しているのは確かである。意見の分かれるところであるが、アルタイ地方の木製円形馬面を想起すると馬面と呼べない。たとえ馬面だとしても特別に何かを象しているわけではなく、額を被う程の大きさでもないのは事実である。殷代では馬面はさほど重要視されていなかったのではないかと考えられる。

西周にはいると量的にも種類のにも増える。まず典型的な例は馬頭をかたどり、耳を表した2つの突起を有するもの(以下、馬頭形A類と称する)で、裏面には革紐を通せるように鈕がある。類例として、まず河南省洛陽古城で見つかった馬葬墓から出土した耳部が尖った4点と、北京市

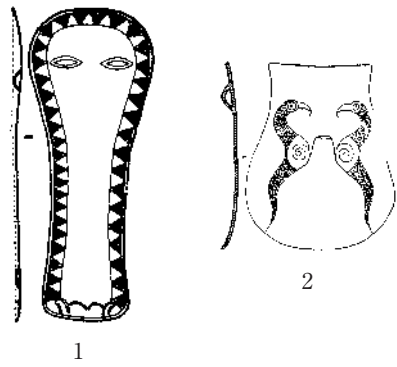


図6 寧夏倪丁村2号土壙墓出土例（縮尺1/6）
（寧夏回族自治区博物館 1987：図4-3, 4）

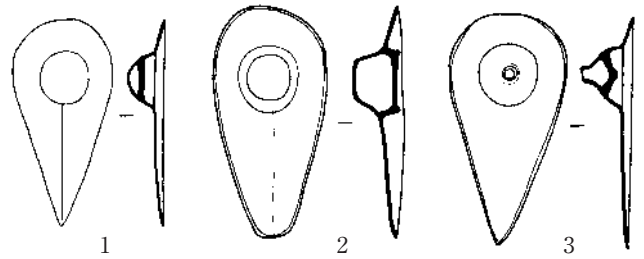


図7 寧夏彭陽県出土例（縮尺1/3）
（楊寧国・祁悦章 1999：図1-6, 8, 16）

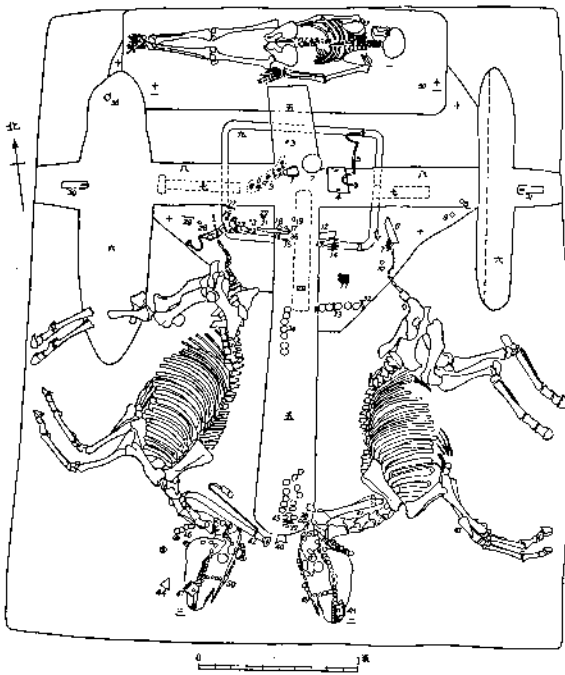


図8 安陽市大司空175号墓
（馬得志・周永珍・張雲鵬 1955：図23）

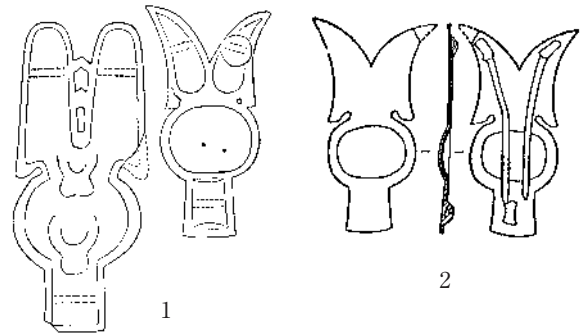


図9 馬頭形A類馬面（縮尺1/6）
1 昌平白浮出土例（北京市文物管理会 1976：図18-5, 6）
2 瑤璃河1193号墓出土例（中国社会科学院考古研究所・北京市文物研究所 1990：図5-9）

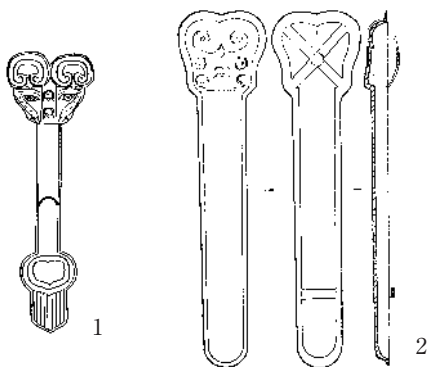


図10 獸頭形（縮尺1/6）
1 張家坡183号墓出土例（中国社会科学院考古研究所 1989：図5-1）
2 張家坡馬葬墓出土例（中国社会科学院考古研究所 1987：図16-1）

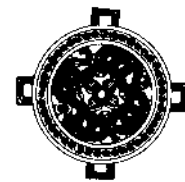


図11 長治市分水嶺14号墓出土例（縮尺約1/2）
（孫機 1985：図19）

近郊昌平県白浮村にある豎穴木槨墓から出土した10点があげられる。後者の10点のうち6点は耳部が尖っており、そのうちの1点は長さが18cmある。残りの4点は耳部が丸く、そのうち1点の長さは24.8cmである(図9-1)。北京市房山区琉璃河1193号墓と陝西省西安市張家坡183号墓からは、耳部が尖ったものが4点ずつ出土している。前者の1点の長さは18.2cm(図9-2)。珍しいものでは洛陽北窯西周17号墓出土例がある。2点出土しているのだが、背面に「獸」という文字が鑄出されている。神獸にある神

秘的な力にあやかっているようにも見える。

次は上半部に饗養の面を表し、その下に細長い長方形の張り出しが付く馬面(以下、獸頭形と称する)で、一見怪獸が大きく舌を出している様にも見える。西安市張家坡183号墓より4点出土。そのうち1点の長さは18.2cm(図10-1)。西安市張家坡村の馬葬墓からは2点出土している。明らかに馬の頭部、ことに前額に装着されており、馬面であることは明らかである。そのうちの1点の長さは22.8cm(図10-2)。北京市近郊昌平県白浮村にある豎穴木

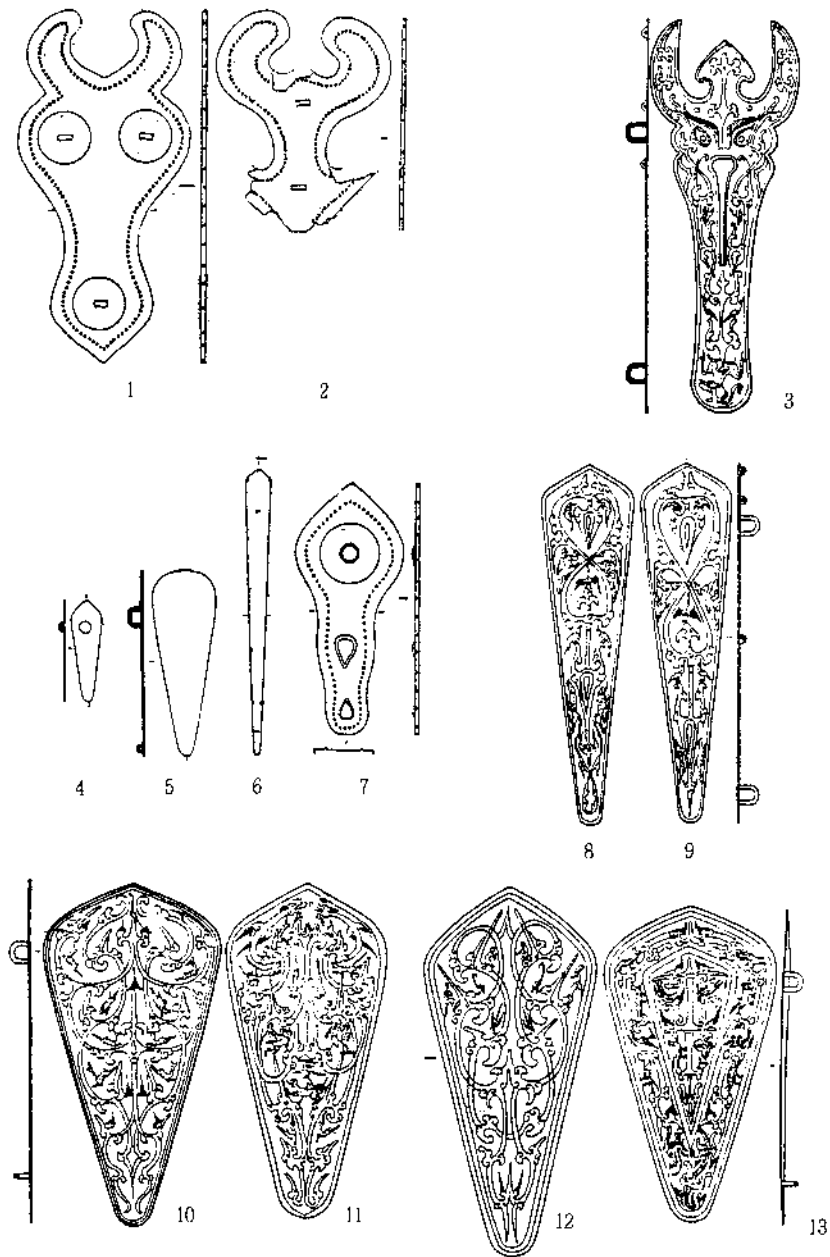


図12 満城漢墓出土例(縮尺1/6)
 1, 2 馬頭形C類 3 準馬頭形A類 4~13 非象形
 (中国社会科学院考古研究所 1980: 図135, 136, 222, 223)

柳墓からは6点出土している。そのうち1点の長さは27cmである。

春秋・戦国時代になるとその数は極端に少ないと言える。管見では明らかに馬面であるものはない。たとえば山西省長治市分水嶺14号墓からは6点の馬面とされるものが出土しているが、出土状況など馬面とする根拠は記されていない。これらは蟠龍文が施されていて、四方に鈕が突起したもので、そのうち1例が図示されている(図11)。縮尺から判断して径5cm程度と小さい。馬面における種類・量が北方地域と中原地域とでは対照的で興味深い。秦に統一されても基本的には変化なかったようである。始皇帝陵2号銅車馬に見られる馬面は、両端が三弧に屈曲した垂葉形である。

漢代に入ると再び馬面はその種類も量も増大させる。河北省満城漢墓から多種類の馬面が出土しているので、紹介する(図12)。墓主は1号墓が中山国靖王劉勝で、2号墓がその王后である。築造年代は1号墓が前154～113年で、2号墓が前118～104年である。馬面は1号墓から38点、2号墓から8点、計46点。1号墓からはまず、両耳が内に向き、両眼と鼻部のあたりが外側に張り出した馬頭形(馬頭形C類と称する)が挙げられる。3点出土しており、いずれも銀製である。そのうちの1点の長さは26.3cm。新たな形態として両耳と鬣をたてた馬を連想させる馬面がある。ここでは準馬頭形A類と称する。上端部に3つの突起があるのが特徴である。青銅製で正面には鍍金。背面には上下に一对の鈕、上部周辺には7つの小鈕を付けている。そのうち1点は正面に大きな両眼、怪獣文、雲気文などを毛彫りで描いている。長さは28.3cm。非象形では細長い逆三角形を基本とした形態で、銀製が9点、青銅製が23点。そのうち5点は細長い圭形をなし、正面には怪獣文や雲気文などを描き、鍍金銀を施している。背面には準馬頭形A類と同様の鈕を付けている。長さは25cm程度。興味深いのは7cm程度の小型の圭形馬面で、鈕はない。報告書では明器としている。2号墓からは非象形が青銅製8点出土している。そのうち4点は膨らみのある圭形をなし、毛彫りで龍文、怪獣文などが描かれている。長さは25cm程度。細長い圭形馬面は山東省九龍漢墓からも出土している。

満城漢墓の出土例以外で特に注目すべき形態が準馬頭形に出現する。これらは多くの前漢遺跡から多数出土するものである(図13)。まず上端部に三突起、中央部には左右対称に刺状装飾があり、その間は丸く張り出した、馬頭部を連想させる形態で、準馬頭形B類とする。これは大量に出土している。多くは中央部に左右対称の透かし彫りがある。また背面に上下1つずつ鈕がある。長さは10cm程度と小さいものが多く、明器と考えられる。例えば河北省

陽原三汾溝漢墓、山東省新屯画像石墓、河南省洛陽燒溝漢墓、青海省上孫家寨漢墓、鄭州市新通橋漢墓などから出土している。いずれも前漢晩期に位置づけられている。また上部は丸いとその左右は角張って3つに突起し、中央には左右に刺状装飾がある。これを準馬頭形C類とする。広州漢墓2060号墓から錫製のものが1点出土している。長さは10cm程度で、明器と考えられる。堅穴式木槨墓で前漢中期に位置づけられている。さらに上部が三弧形を呈し、中央部が丸く張り出し、下部は長く伸びているものもある。これを準馬頭形D類とする。江蘇省烟袋山漢墓から10点出土している。長さは8cm程度である。明器と考えられる。堅穴式木槨墓で前漢中期に位置づけられている。また漢の支配下にあった楽浪時代の朝鮮半島においても馬面が出土している。平壤石巖里第219号墓から準馬頭形A類が出土している(図14)。長さは25.7cmである。

馬頭形は西周時代に出現しているが、満城漢墓出土例がその終末形態を表していると言える。ただし西周のものとは直接関連しているものかどうかは不明である。それに代わって登場したのが準馬頭形タイプである。興味深いのは初期に位置づけられる満城漢墓出土例(A類)の場合、上端部の三突起が両耳と鬣を比較的忠実に模しているが、前漢晩期のもの(B類)は本来の形態が分からないほど圖案化されていることである。しかもC、D類と段階を踏んだと考えると、B類ではその三突起は一旦上に突き出してからほぼ均等に枝分かれする形態に様式化されている。

以上、中国を中心に東アジアの馬面を概観した。中原地域に限って見れば、西周時代と漢代の盛行さと、春秋・戦国時代の欠乏は対照的で興味深い。また漢代に入って、これまでなかった複雑な輪郭を持つ新しい形式である準馬頭形が現れ、しかも他を放逐するかのようには広まって行くのも興味深い(図15参照)。つまり一様化して行くのだが、これは新しい現象である。相馬隆が「この新しい馬面形式は、伝統的な諸形式とはまったく異なる図柄と輪郭を持ち、漢代に盛行し、また消えていった」と指摘する通りである(相馬1967年)。相馬は北アジアの馬面の影響と考えた。中原ではその意味も失ったかのように馬面が下火であった春秋・戦国時代に、なお盛んに作り飾り続けたのは北方騎馬民族であったことは示唆的でもある。

考察

西アジアでの馬面の初現は今のところウラルトゥである。そして北シリアあたりまで広まるが広範囲ではなく、形態・文様にもある程度の共通性が見られることから、限定的な伝播であったことが分かる。西アジアは東アジアや北アジアとは対照的に、非象形タイプのみの馬面であるという一定の独自性も見られる。ウラルトゥの地理的位置か

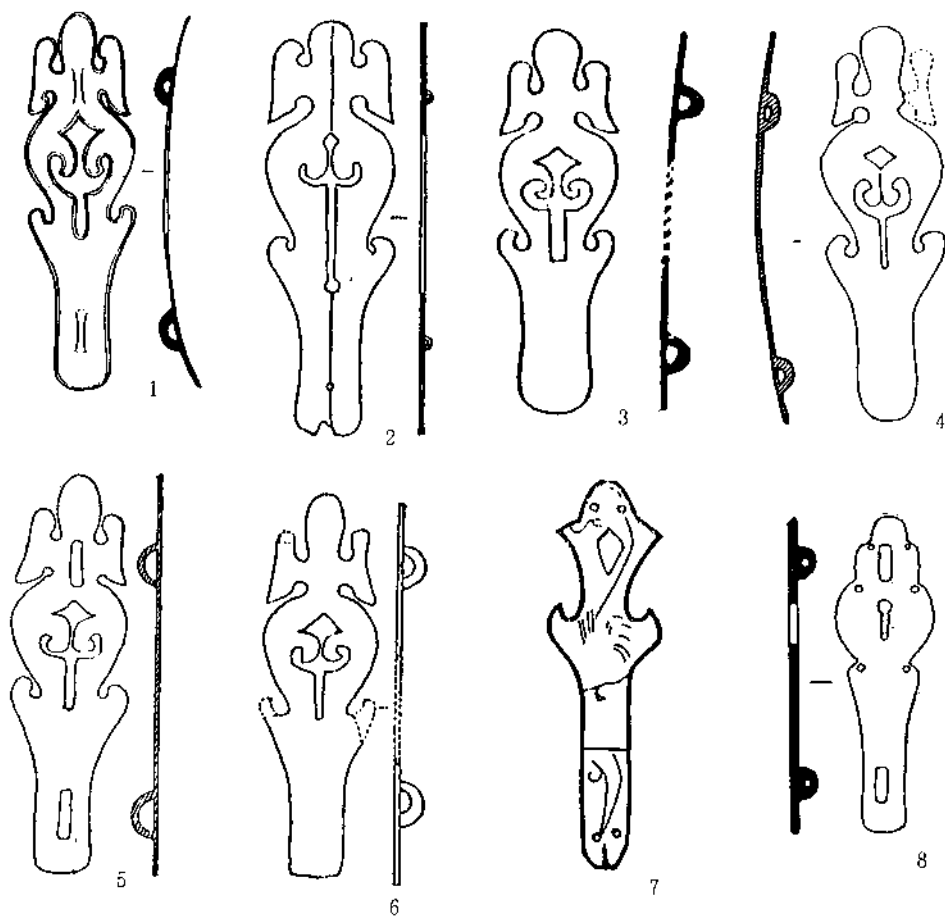


図13 準馬頭形馬面 (縮尺 1/2)

1~6 B類 7 C類 8 D類

1. (河北省文物研究所・張家口地区文化局 1990 : 図 20-9)、2. (済南市文化局、平陽県博物館 1988 : 図 21-4)、3. (中国社会科学院考古研究所 1982 : 図 81-14)、4. (寧夏文物考古研究所・寧夏塩池県文体科 1988 : 図 21-9)、5. (青海省文物考古工作隊 1981 : 図 11-3)、6. (鄭州市博物館 1972 : 図 5-4)、7. (広州市文物管理委員会・広州市博物館 1981 : 図 142-3)、8. (南京博物院 1987 : 図 17-12)

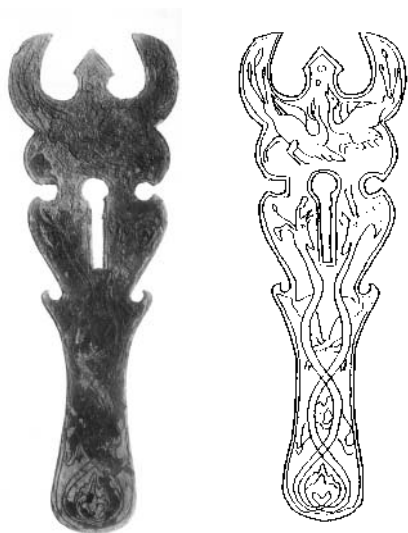


図14 石巖里第219号墓出土例 (縮尺 1/4)

(梅原末治・藤田亮策 1959 : 図版 84、右はそのトレース)

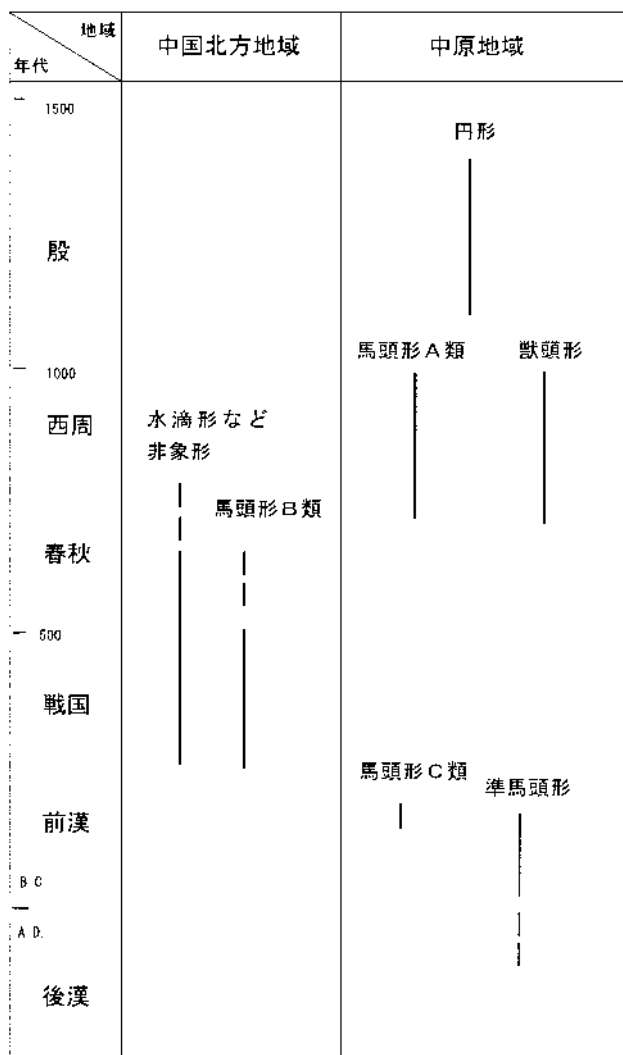


図 15 中国の主な馬面の消長

払う」というような、馬面に直結する呪術的な意味を失うのであるが、その原因はスキタイを初めとする騎馬民族ではないかと筆者は考えている。騎馬民族の騎兵隊に、西アジアではそれまで主流であった歩兵・戦車部隊は、苦戦を強いられた。前8世紀後半のことである。西アジアの諸国はこの現実を目をそむけるわけにはいかず、競うかのように新たな戦闘形態に相応するような軍隊に再編することになる。すなわち模倣から始めた騎兵隊への移行である。既成観念にとらわれることなく、一斉に騎兵隊を導入・編制したと考えられる。その際、既成の呪術的な枠組みは変化を受け、馬面はそれまでの意味合いを失ったのではないか。その重い意味合いを失った分、軽やかとなり、広まってゆく要因となったのであろう。さらに言うならば、筆者は前7世紀頃の馬面はスキタイの馬面をファッション的に模倣したのではないかとも思っている(巽 1995a)。今のところ前7世紀のスキタイ馬面は出土してはいないが、有機質の馬面が存在した可能性はある。こうしたスキタイの馬面を、その背景に存在する意味には頓着せず、形から模倣したのではと思うのである。

東アジアでは、中国の北部に殷時代後半に現れている。戦車の伝播を考慮に入れば北方民族からの影響も考えられる。しかし、初期の北方民族が馬面を用いていたとしても、有機質のものと思われ、残存しないために推測の域を出ない。中国では早い段階から非象形タイプと象形タイプが存在していて、北アジアと類似している。非象形タイプだけの西アジアよりは北アジアと共通性があると精々言える程度である。その後、西周において独自の形態のものが出現しているように馬面は定着している。ところが、春秋・戦国になると出土例が減少する。特に中原地域は途絶えた感さえある。これに対し中国北方地域での豊富な出土が対照的である。漢代に入って再び馬面は盛行するが、これは春秋・戦国時代において北方民族が盛んに用いていたことを考えると、やはり北方民族の影響と見るのが妥当であろう。

漢代の特徴的な準馬頭形馬面がツインバルカ古墳出土の金製女神文馬面に類似していることは相馬隆(相馬 1967)により早くから指摘されている。中国にもたらされたのは、前漢のものがすでに十分中国化されていることから、たぶん戦国末頃ではないかと相馬は考えている。中国はすでに古くから馬面は用いられていた地であることから、馬面を受け入れる下地はあったと考えられる。しかしツインバルカ出土例と準馬頭形馬面とをつなぐ例がその間の地域では今のところ出土していない。当然、戦国時代の中国北部からの出土例にも、ツインバルカ出土の金製女神文馬面に類似するものはない。しかしながら、この女神文馬面類似例がもたらされなかったと断定することもできない。ただし、

ら北アジアとの接触で出現した可能性もあるが、独自に発生したと考えるのが一番妥当であろう。Aグループに属するウラルトゥの馬面に戦いの神であるテイシエバの像が多く描かれている事実³⁾から、「神が馬に降臨し、勝利へと導き、邪悪なるものを追い払う」というような共同観念・呪術的意味が存在していたと考える。北アジアからの影響ならばこうした観念も伝わったのであろう。独自発生ならこうした観念が強く存在し、馬面を生み出したと思われる。広域に伝播しなかったのは、西アジアにおいて元々、「神が馬に降臨する」というような共同観念がなかったためではないか。つまりウラルトゥが特異であったのであろう。したがって受け入れに差違が生じたと考えられる。

ところが前7世紀頃に一変するのはすでに述べたとおりである。馬面を用いてこなかったアッシリアに馬面が出現するようになることから分かるように、前7世紀頃に西アジアでグループBの馬面が普及する。西アジアの馬面は「神が馬に降臨し、勝利へと導き、邪悪なるものを追い

たとえこの女神文馬面類似例がもたらされていたとしても、少なかったに違いない。数ある馬面の中からむしろ珍しい馬面を選んで取り入れたのは、単にデザイン的に斬新で優れていただけでなく、まさに珍しいゆえに他集団と区別できるからではなかっただろうか。あるいは中国北方地域で盛んに用いられていた馬頭形B類をもとに独自にアレンジして新たに作り上げた馬面であるとも考えられる。馬頭形B類の影響で馬頭形C類が出現し、それが準馬頭形へと変化したと捉えることも十分可能である。無理にツインバルカ出土例とつなげる必要もない。いずれにせよ、中国北方地域より取り入れた馬面を中国風にアレンジし、独自に準馬頭形タイプを生み出して、意図的に大量生産していったと見たい。漢という新しい時代の到来を示し、その集団意識を高めさせるかのように広まっていったのではないか。

こうして東西のアジアの馬面を見ると、西アジアでは前7世紀頃、東アジアでは漢代初頭に、ある類似した現象が起きている。つまり比較的細長い馬面が瞬く間に広まり、流行しているのである。呪術的な意味よりファッション性を重視していて、しかもその背景に騎馬民族からの影響があるのではないかと考えさせられる点でも共通する。

おわりに

現代の軍隊においても、小さなバッジ1つで階級が示される。そう考えると、たとえ防具という直接的な機能がなくても馬面を付ける意味は広まる。神像が多い段階では、勝利を導き、邪悪なものを追い払うというような、呪術的な意味合いが強かったと思われるが、時代が下るに連れて、集団意識を示すといった社会的・集団的な意味合いが持たされるようになったと考えられる。様々な視点から馬面は見に行く必要がある。

註

- 1) 香港で発行された図録(香港区域市政局・内蒙古自治区博物館1995)に同じ出土例と思われるものが掲載されている。報告書の記述と写真で見ると形態とがまったく同じで、しかも大きさも一致する。図録では年代はなぜか戦国時代となっている。
- 2) 「大銅泡」と報告書に記載されている場合が多い。半球形をなす大きな金具という意味で、馬面とは同定されていない。たとえば河南省安陽市郭家庄52号車馬坑出土例は両馬の額部分から出土しているが、他の面繫の飾り金具も円形でそれらより一際大きいという以外差がないのでひとまとめにして「銅泡」として思われる(中国社会科学院考古研究所安陽工作隊1988)。
- 3) ウラルトゥの青銅器では、馬面以外にも神像が描かれている。轆の先端を飾っていた筒形飾金具、轆の扇形飾金具、戦車のボックスの側面に飾られていたと考えられる円形飾金具、馬の胸飾、首輪、戦士の兜、帯金具などが挙げられる。描かれている神はテイシェバが圧倒的である。戦車の飾りと兵隊が身につけるものである。こうしたものに神が降臨し、戦いを勝利へと導

くのである。馬面はその飾る位置から判断して、戦力で最も重要な馬を代表させるものであったに違いない。

主な参考文献

- Barnett, R. D. 1957 *A Catalogue of the Nimrud Ivories with other examples of Ancient Near Eastern Ivories in the British Museum*. London, The British Museum.
- Curtis, J. 1988 *Bronzeworking Centres of Western Asia c. 1000-539 B.C.* London and New York, Kegan Paul International.
- Goff, C. 1969 Excavations at Baba Jan, 1967: Second Preliminary Report. *Iran* 7: 115-129.
- Crouwel, J. H. 1987 Chariot in Iron Age Cyprus. *Report of Department of Antiquities Cyprus*: 101-118.
- Crouwel, J. H. and V. Tatton-Brown 1988 Ridden Horses in Iron Age Cyprus. *Report of the Department of Antiquities Cyprus*: 77-87.
- The Israel Museum 1991 *Urtartu-A Metalworking Center in the First Millennium B.C.E.* Jerusalem, The Israel Museum.
- Karageorghis, V. 1967, 1970, 1973, 1974 *Excavations in the Necropolis of Salamis I, II, III, IV*. Cyprus, The Department of Antiquities Cyprus.
- Kantor, H. J. 1962 A Bronze Plaque with Relief Decoration from Tell Tainat. *Journal of Near Eastern Studies* 21/2: 93-121.
- Littauer, M. A. and V. Karageorghis 1969 Note on Prometopidia. *Archäologischer Anzeiger* 2:152-160.
- Littauer, M. A. and J. H. Crouwel 1979 *Wheeled Vehicles and Ridden Animals in the Ancient Near East*. Leiden/Köln, E. J. Brill.
- Medvedskaya, I. 1988 Who destroyed Hasanlu IV? *Iran* 26: 1-15.
- Moorey, P. R. S. 1971 *Catalogue of the Ancient Persian Bronzes in the Ashmolean Museum*. London, Oxford University Press.
- Özgen, E. 1984 The Urartian Chariot Reconsidered: II Archaeological Evidence, 9th-7th centuries B.C. *Anatolica* 11: 91-154.
- Özgül, T. 1961 Excavations at Altintepe. *Belleten* 25: 269-290.
- Rudenko, S. I. 1970 *Frozen Toms of Siberia-the Pazyryk Burials of Iron Ages Horsemen*. Berkeley and California, University of California Press.
- de Schauensee, M. & Jr. R. H. Dyson 1983 Hasanlu Horse Trappings and Assyrian Reliefs. In P. H. Harper & H. Pittman (eds.), *Essays on Near Eastern Art and Archaeology in Honor of C. K. Wilkinson*, 59-77. New York, The Metropolitan Museum of Art.
- Sevin, V. 1978 A Comment on the Assyrian and Urartian Horse Trappings. *Anadolu Arastirmalari* 6: 111-129.
- Tasyürek, O. A. 1975 Some Inscribed Urartian Bronze Armour. *Iraq* 37: 151-155.
- Young, R. S. 1962 The 1961 Campaign at Gordion. *American Journal of Archaeology* 66: 153-168.
- 河北省文物研究所・張家口地区文化局 1990「河北省陽原三汾溝漢墓發掘報告」『文物』1990年1期 1-18頁。
- 広州市文物管理委員会・広州市博物館 1981『広州漢墓』北京文物出版社。
- 項春松・李義 1995「寧城小黒石溝石槨調査清理報告」『文物』1995年5期 4-22頁。
- 山西省文物管理委員会 1957「山西長治市分水嶺古墓の清理」『考古學報』1957年1期 103-118頁。
- 山東省博物院 1972「曲阜九龍山漢墓發掘簡報」『文物』1972年5期 39-44頁。
- 青海省文物考古工作隊 1981「青海大通上孫家寨115号漢墓」『文物』1981年2期 16-21頁。

- 蔡運章 1996「洛陽北窯西周墓青銅器銘文簡論」『文物』1996年7期 54-69頁。
- 濟南市文化局、平陽県博物館 1988「山東平陽新屯漢画像石墓」『考古』1988年11期 961-974頁。
- 孫機 1985「中国古独輪馬車の結構」『文物』1985年8期 25-40頁。
- 中国社会科学院考古研究所 1980『滿城漢墓發掘報告』北京 文物出版社。
- 中国社会科学院考古研究所 1982『洛陽燒溝漢墓』北京 科学出版社。
- 中国社会科学院考古研究所禮鎬工作隊 1987「1984-85年禮西西周遺跡、墓葬發掘報告」『考古』1987年1期 15-32頁。
- 中国社会科学院考古研究所 1988「洛陽老城發現四座西周車馬坑」『考古』1988年1期 15-23頁。
- 中国社会科学院考古研究所禮西發掘隊 1989「長安張家坡M183西周洞室墓發掘簡報」『考古』1989年6期 524-529頁。
- 中国社会科学院考古研究所・北京市文物研究所 1990「北京琉璃河1193号大墓發掘簡報」『考古』1990年1期 20-31頁。
- 中国社会科学院考古研究所安陽工作隊 1988「安陽郭家庄西南的殷代車馬坑」『考古』1988年10期 882-893頁。
- 鄭州市博物館 1972「鄭州新通橋漢代画像空心磚墓」『文物』1972年10期 41-48頁。
- 北京市文物管理会 1976「北京地区的又一重要考古收穫、昌平白浮西周木槨墓的新啓示」『考古』1976年4期 246-258頁。
- 南京博物院 1987「江蘇儀徵烟袋山漢墓」『考古學報』1987年4期 471-502頁。
- 寧夏回族自治区博物館 1987「寧夏中寧県青銅短劍墓清理簡報」『考古』1987年9期 773-777頁。
- 寧夏文物考古研究所・寧夏塩池県文体科 1988「寧夏塩池県張家場漢墓」『文物』1988年9期 15-25頁。
- 香港区域市政局・内モン自治区博物館 1995『鞍馬文化－中国古代北方遊牧民族』香港文化博物館
- 馬得志・周永珍・張雲鵬 1955「1953年安陽大司空村發掘報告」『考古學報』1955年第9冊 25-90頁。
- 楊寧国・祁悦章 1999「寧夏彭陽県近年出土的北方系青銅器」『考古』1999年12期 28-37頁。
- 劉德禎・許俊臣 1988「甘肅慶陽春秋戰國墓葬的清理」『考古』1988年5期 413-424頁。
- 相馬隆 1967「楽浪古墳出土馬面考」『ミュージアム』201号 22-31頁。
- 梅原末治・藤田亮策 1959『朝鮮古文化綜覧』3卷 養徳社。
- 駒井和愛 1936「先秦時代の馬面とその始源」『史苑』10卷2号（駒井和愛 1974『中国考古学論叢』慶友社 所収 52-55頁）。
- 巽善信 1995a「紀元前7世紀における西アジアの馬面」『オリエン』38卷2号 94-104頁。
- 巽善信 1995b「東アジアの馬冑」『古代文化』47卷5号 1-17頁。
- 巽善信 2003「西アジアの馬面」『西アジア考古学』4号 13-20頁。
- 東京国立博物館 2005『中国北方系青銅器』。
- 日本経済新聞社 1969『スキタイとシルクロード美術展』。
- 日本放送協会NHKプロモーション 1992『スキタイ黄金美術展』。
- 水野清一・江川波夫 1935『内モン古・長城地帯』東亜考古学会。

巽 善信

天理大学附属天理参考館

Yoshinobu TATSUMI

Tenri University Sankokan Museum